

やっしろみょうけんさい

八代妙見祭

やっしろみょうけんさい くまもとけん だいひょう まつ
八代妙見祭は、熊本県を代表する祭りです。
みょうけんさい かみさま の みこし ちゅうしん
妙見祭には、神様が乗られる神輿を中心にし
て、神輿を守る人たちを始め、約1500人が
さん か ぎょうれつ なが
参加します。行列の長さは、約1キロメー
さいしよ さいご み いちじかん
トルもあり、最初から最後まで見るのに一時間
くらいかかります。



◆お下り（11月22日）

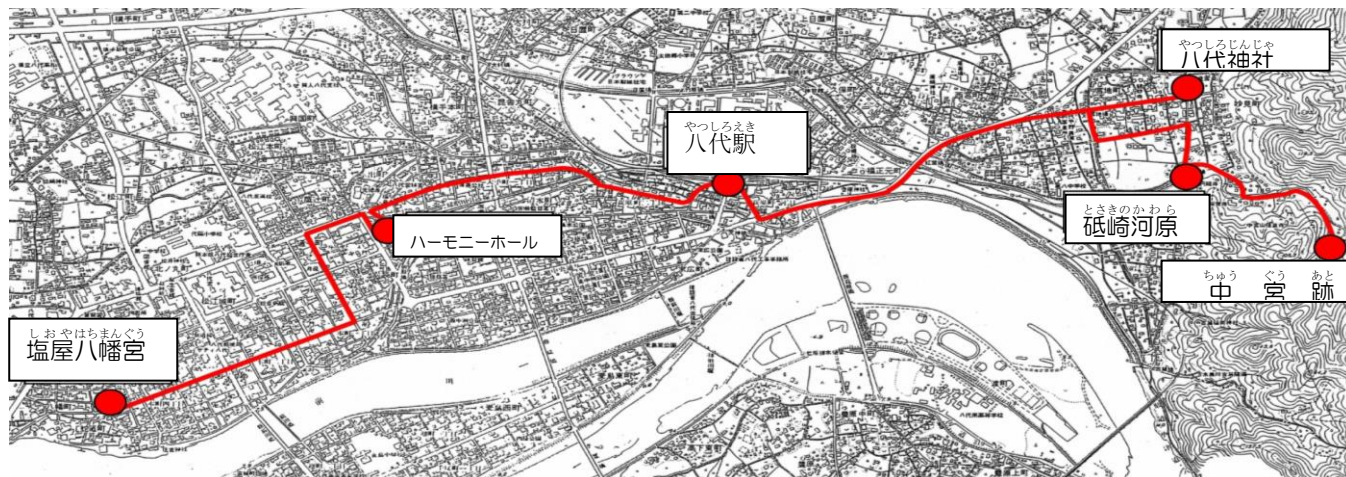
ご ご じ やつしろじんじや きゅうみょうけんぐう だ みこし ぎょうれつ じんじや しゅっぱつ
午後2時、八代神社（旧妙見宮）から出される神輿などの行列が、神社を出発してアー
と お し お やはちまんぐう い いっぱく
ケードを通り、塩屋八幡宮まで行き、そこで一泊します。

◆お上り（11月23日）

あさはや し お やはちまんぐう しゅっぱつ し し かきぼこ だ もの みこし いっしよ やつしろ
朝早く塩屋八幡宮を出発して、獅子や笠鉾などたくさんの出し物も神輿と一緒に八代
じんじや い やつしろじんじや つ きゅうけい あと ぎょうれつ とさきのかわら む しゅっぱつ
神社まで行きます。八代神社に着いてしばらく休憩した後、行列は砥崎河原に向けて出発
しします。うま お き だ ひとびと かんせい あ なか みこし し し しんめ
馬追いや亀蛇（ガメ）のパフォーマンスで人々の歓声上がる中、神輿、獅子、神馬
ちゅうぐうあと むかし みょうけんぐう ところ ところ い ちゅうぐうあと むかしがみさま むか
は中宮跡（昔の妙見宮のあった所）という所まで行きます。中宮跡は、昔神様を迎えて
まつり ところ し し まい ちゅうぐうあと ぎょうじ お ぎょうれつ やつしろ
祭をした所で、ここでも獅子舞があります。中宮跡での行事が終わると、行列はまた八代
じんじや ちど みこし そうこ ちど ひ ぎょうじ お
神社に戻り、神輿を倉庫に戻してこの日の行事が終わります。

★神輿が塩屋八幡宮まで来るのは約100年前から

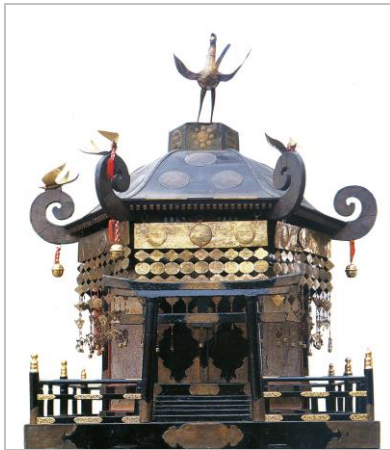
げんざい くだ ぎょうれつ し お や く ねんまえ
現在のようにお下りの行列が塩屋まで来るようになったのは、約100年前の 1922年
（大正11年）からです。それまでは、やつしろじんじや ちゅうぐうあと あいだ くだ のぼ おこな
（大正11年）からです。それまでは、八代神社と中宮跡の間でお下りとお上りが行われ
ていました。とさきのかわら あと ちゅうぐうあと い みこし いま むかし くだ のぼ
砥崎河原の後に中宮跡に行く神輿は、今でも昔の「お下り・お上り」もして
いるのです。



神社から出るもの

神輿（みこし）

行列の中心は、神様の乗り物の神輿です。今の神輿は 1998年（平成10年）に新しく作られたものですが、それまでは、約400年前に細川三斎が神社に寄付した神輿を大事に使っていました。



古い神輿と天井に描かれた龍の絵

火王・水王・風王



鼻の高い火王・水王・風王は、神輿を案内する役割です。その順番は、お下りの前の日の深夜に神様に決めてもらいます。
火王が先頭だと来年は晴れの多い日、水王だと雨の多い日、風王だと台風の多い日になると信じられています。

菅翳（すげのさしば）・紫翳（むらさきさしば）



すげのさしば むらさきさしば
菅翳・紫翳

← 翳（さしば）は、大事なものをおおひ隠すためのものです。菅翳は、雨の時に、紫翳は晴れの時に使うものでした。



四神旗（しじんき）

→ 東西南北それぞれの方角の守護神の旗です。
東は青龍、西は白虎、南は朱雀、北は玄武です。



いろいろなだしもの

◆獅子 子 ～中国風の獅子舞～

ぎょうれつ せんとう し し いま ねんいじょうまえ
行列の先頭は獅子です。今から 300 年以上前、
やつしろ しょうにん い ざくらやかんしち ながさき み ちゅうごくふう
八代の商人の井桜屋勘七は、長崎で見た中国風
の獅子舞を見て感動し、八代の妙見祭に取り入
れたいと考えました。その頃の長崎では、青色

の獅子が 1 頭出ていたようですが、勘七は、オスとメスの 2 頭の獅子にしました。玉をも
って獅子と一緒に舞うタマフリの子供や、楽器を演奏する人の服などは長崎で見たオラン
ダや中国の人たちの服を取り入れました。チャルメラやドラ、長ラッパなど外国の楽器も
取り入れて、八代オリジナルの獅子舞を作りました。獅子舞は、仏様の教えを聞いて獅子
が喜び遊んでいる様子を表していると言われています。

この獅子舞が妙見祭に初めて出されたのは 1691 年（元禄 4 年）です。それまでは、し
っぽが籠でできた獅子に車をつけて笛や太鼓を鳴らしながら引いて歩いていたようです
から、この新しい獅子舞を初めて見た人たちはどんなに驚いたことでしょう。

獅子の中には二人が入り頭と尻尾の係をします。角が 2 本で胴体が赤色と白色なのが
オスで、角が 1 本で胴体が赤色と黄色なのがメスです。

獅子舞の楽器

◎太鼓：リズムを担当する重要な楽器。

◎チャルメラ・チャンメラ：メロディーを担当する楽器。

◎長ラッパ：獅子を起こす時などに鳴らして盛り上げる楽器。

◎ドラ：長ラッパとともに盛り上げる楽器。黒い帽子をかぶっているほ
うがオス用のドラ、白い帽子のほうメス用。



★妙見祭の獅子舞の影響を受けた獅子舞★長い耳、毛むくじゃらの胴体、大きな尻尾が特徴



八代市高子原町（こうごばらまち）



八代市鏡町（かがみまち）



宇土市（うとし）



氷川町宮原（ひかわちょうみやはら）



宇城市小川町（うきしおがわまち）



宇城市松橋町（うきしまつばせまち）

◆ 奴

奴は、八代の殿様の松井直之（松浜軒を建てた人）が、江戸（今の東京）に行った時に、槍持ちとしてついて行った松江村の虎右衛門が、奴の舞い方を習ってきたのが始まりです。今から340年～350年くらい前のことです。

はじめは松江村で受け持っていましたが、虎右衛門の娘のお婿さんの三助にも教えた後は、

三助の住んでいる高子原村と一緒に出すようになりました。その後、高子原村だけで出すようになり、三助の子孫が奴の舞い方の先生となって伝えてきました。1987年（昭和62年）からは保存会ができて松高校区の人たちを中心に奴を受け継いでいます。2007年（平成19年）からは子供奴も妙見祭に参加するようになりました。



奴とは、お侍の身の回りの世話をするのを仕事とした男の人たちのことです。主人が出かける時に荷物持ちなどをしました。人と違う格好をしたり、変わった歩き方をしていたりしていたのが各地の祭りに取り入れられていったものです。

奴の演技をする人たちを「奴土」と言い、殿様の着物を入れたハサミバコ（衣裳入れ）の担当が4人、タテガサ（日傘）とダイガサ（頭にかぶる笠）が2人ずつの合計8人です。



ハサミバコ
（挟み箱）



ダイガサ
（台笠）



タテガサ
（立傘）

★ここにもあるよ。奴★



どちらも「トコセイ」と呼ばれています。

左) 氷川町竜北

（ひかわちようりゅうほく）

右) 宇城市小川町

（うきしおがわまち）

奴の演技をするを「奴振り」ということから、雨が降ることを願って行われたそうです。

◆木馬 ～飾馬を小さくしたもの～

紙や木、布などでできた作り物の馬の中に子供が入って歩きます。

木馬は、1737年（元文2年）、八代の殿様の松井寿之70歳のお祝いとして、家来が1頭、町の人が4頭作って出したのが始まりだと伝えられています。

飾馬を小さくしたものが木馬です。飾馬が12頭（1年は12か月だから）出ていたように、木馬も12頭出ていたことが約200年前に描かれた妙見祭の絵からわかります。その頃は、八代の町の子供たちが出ていました。

木馬は、約50年前の昭和40年代を最後に出なくなりましたが、1987年（昭和62年）から出し物の復活が始まり、まず6頭が作られました。12頭がそろったのは、1989年（平成元年）でした。現在は、希望者が参加しています。



◆神馬

神馬は、もともとは、神様への捧げもの（おくりもの）でしたが、だんだん神様の乗り物だと考えられるようになって行列に加わりました。江戸時代は、八代の殿様の馬を神社に寄附していました。現在は、祭りの前の年の12月1日に来年神馬を出す人を決めます。希望する人が二人以上いたら、くじで決めますが、田中町の人が希望したら他の人は出すことができません。



◆飾馬

飾馬は、頭に飾り物をつけた馬です。江戸時代は、祭りに参加する神社やお寺の人が乗る馬で、殿様や家来の馬を12頭出していました（1年が12か月だから）。今は、希望する団体の人たちが馬を出しています。頭の飾りは、アニメのキャラクターなどその時に人気のあるものが使われます。



◆ 亀 蛇 (ガメ)

亀蛇は、亀と蛇が合体した想像上の生き物です。妙見の神様が海を渡って来たときの乗り物という伝説をもとに作られたものです。妙見の神様は、北極星です（北斗七星とも言われます）。中国では、東西南北それぞれに守護神がいると考えられていて、北の守護神が玄武という亀に蛇が巻き付いたものでした。そのため、妙見の神様が亀蛇に乗って来たという伝説が生まれました。



亀蛇の中に入っているのは5人。
一人が首を動かす棒を持って、
4人が甲羅の部分を持ちます。

亀蛇を出すのは、出町の人たちです。100 キログラム以上ある亀蛇を担いで片道約6キロメートルを歩くのは簡単ではありません。そこで、亀蛇を担ぐ人たちは、力の強い人に頼んでいます。出町の人たちは、先導をしたり、亀蛇の周りで、進む方向を中の人に教えたりします。尻尾の赤い毛（麻を赤く染めたもの）を持っていると、病気にかからないとかお金がたまると言われています。

★ここにもいるよ亀蛇★ 自由自在に動き回る人気者の亀蛇には仲間がいます。



宇城市小川町の亀蛇は、首が長〜く伸びます。

氷川町宮原の亀蛇。約200年前の妙見祭の亀蛇に一番似ています



宇城市小川町河江の亀蛇は、担ぎませんが、首が長〜く伸びます。



八代市沖町の亀蛇。大人八代市沖町の亀蛇は、大人が担いでいたころの頭が残っていたので、甲羅をつけて子供用に作りかえました。

妙見祭のたくさんの出し物の多くが江戸時代から修理をしたり作り直したりしながら町の人たちが大切に守ってきました。これからも妙見祭が誰もが楽しめる祭りとなるように、みなさんもお手伝いをしたり応援するサポーターになってください。